特別天然記念物

ニホンカモシカと霊仙山

はじめに

ニホンカモシカを見たことがありますか。短足胴太でスマートとはいえませんが、実に親しみのある目をした動物です。最近では飼育されている所も多くなりましたし、図鑑、テレビなどにも時々姿が出てきて一度は見られた方も多いと思います。

日本に生息する哺乳動物は多種多様ですが本州に生息する大型獣にはニホンツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンイノシシ、そしてニホンカモシカの4種があげられます。滋賀県にはいわゆる高山はありませんが4種の大型獣がすべて生息しています。

このうちニホンカモシカ（以下ではカモシカと呼びます）は偶蹄目ウシ科に属し、昭和30年に国の特別天然記念物に指定されました。まだなぞの多い動物ですが、日本特有の動物であること、氷河期からの生き残りではないかといわれるほど古くから生息していることなどから、動物の進化や社会さらに地史などを研究する上で今後いろいろな情報を与えてくれるものと考えられています。それではカモシカは実際どのように生活しているのでしょうか。鈴鹿山系霊仙山を例にしてお話ししたいと思います。

霊仙山の自然環境

霊仙山（標高1084m）は鈴鹿山系北端にあり、頂上部を含む西半分は犬上郡多賀町、坂田郡山東町、米原町に、東半分は岐阜県にまたがって位置しています。すぐ北に有名な伊吹山（1377m）がそびえ、それにくらべてめだたぬ山域ですが、春の花、夏の涼風、秋の紅葉、冬の雪を求めて地元はもちろん大阪や名古屋方面からも登山客がたえません。

気象条件については過去2年間標高 810mの地点で測定したところ、年平均気温は 5.7℃（最高26℃～最低－10℃）、最多積雪は 1.6mほどになりました。特に12月下旬から2月下旬の積雪期を中心にかなり厳しい寒さとなります。全般に日本海型気候の影響が強いようです。

地質は伊吹山や他の鈴鹿山系北部の山同様に中腹からは石灰岩質で頂上付近にはドリーネもみうけられます。

霊仙山のニホンカモシカ

霊仙山頂上部

1982．5．31

財団法人　滋賀県文化財保護協会

植生は中腹まではアカガシ・ウラジロガシを含む暖帯林で、さらに上部はコナラ・クリを含み一部にブナ・ミズナラも残る温帯林に近くなっていきます。頂上部はササ原でミズナラなどの小灌木が点在しています。気温からみると中腹以上は温帯落葉樹林を形成する条件が整っているのですが、どうもそのような林はあまりみられません。これは薪炭の材料として伐採が行われたことなどによるもので自然林といえども人の手が加わった二次林の要素が強いようです。スギを主体とする植林もさかんで頂上付近まで施行されています。植生だけみても霊仙山は古くから地元の人々の生活の場の一部であったことがよくわかります。

霊仙山の哺乳動物

霊仙山に生息する哺乳動物には、ニホンザル、ノウサギ、ホンドタヌキ、ホンドギツネ、ホンドテン、ホンドイタチ、ニホンアナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカ、ニホンカモシカ、ネズミ類、コウモリ類があげられます。他に未確認ですがムササビも生息していると思われます。ニホンツキノワグマは生息していないようです。全般に他の鈴鹿山系の山々に生息するものと大差はありません。

それぞれの動物に特色がありますが特に、霊仙山のニホンザルは研究者の調査対象となり生態上の数々の新発見がなされました。ニホンザルはヒトに対し攻撃的な時があるということを聞きますが、少なくともそのようなことを見たことはありません。一般に野生の哺乳動物は警戒心が強く、ヒトに対しては動物から回避するようです。哺乳動物が目撃しにくいことはこのことのよい証拠といえます。しかし、ヒトが動物の習性を知りうまく接すればかなり近くからその生態を見せてくれます。

霊仙山におけるカモシカの分布

カモシカの生息密度を推定するために霊仙山の頂上部を中心に踏査と定点観察を行いました。そして目撃できた頭数を踏査面積（生息可能と思われる面積）で割り生息密度を概算したところ1.35頭／km²になりました。この調査には 120余日をかけましたが、残念ながら生息密度を正確に算出することはきわめてむずかしく今後も継続して調査する必要があるようです。

さて霊仙山のカモシカ分布について注目すべき事項を列記してみましょう。

① 1979年に環境庁が発表したカモシカ生息密度の全国平均は2.66±0.21頭／km²でした。これと比較すると霊仙山での生息密度はかなり低いものといえます。

② 踏査中わかったことですが、どうも分布に片よりがあるようです。生息可能と思われるのにカモシカの生活痕跡もない所があ

ニホンジカの母子群

ニホンカモシカのツガイ（茶子とダンナ）

ります。

③　全国各地での観察では、カモシカは２～３頭による家族群単位で一定の行動圏をもつことがわかってきました。霊仙山で観察中の家族群も同様に一定の行動圏をもっているようです。

④　多積雪の地帯に生息するカモシカで冬期に行動圏を標高の低い所へうつる季節的な移動がみられる例があります。しかし霊仙山ではこのような移動はみられていません。

以上から霊仙山のカモシカは通年ほぼ同じ行動圏内に定住しており、さらにカモシカたちの各行動圏は密に連続しているのではなくまばらに分散していると思われます。またこれが低密度な生息状況になっている原因の一つと推測されます。なぜこのように低密度でまばらな分布になったのか、分布が今後どのように変化するのか、なぞはつきません。

霊仙山におけるカモシカの出現状況

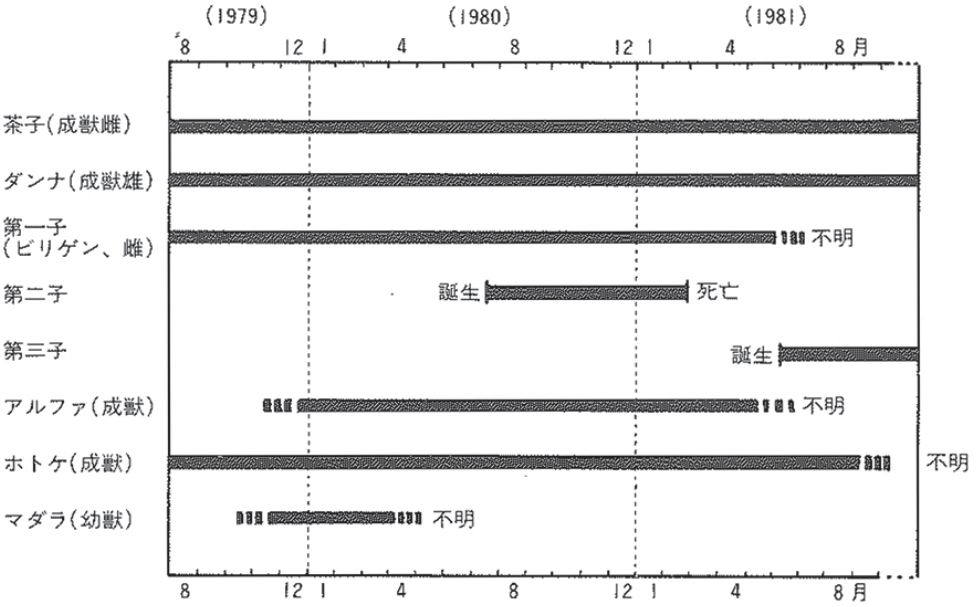
霊仙山中の定点から観察を続けるうちに、出現するカモシカが同じ個体であることに気づきました。顔面の模様、体色、角の形などを根拠にしましたが、これを個体識別するといいます。個体識別した１才以上のカモシカには名前をつけました。こうして識別したカモシカとその出現状況を図にまとめました。

ニホンカモシカの母子群(茶子と第三子)

年により変動がありますが、茶子(成獣雌)、ダンナ（成獣雄、茶子とツガイを形成する)、そして当才子の３頭による家族群は連続してみられています。

カモシカの繁殖期はニホンジカと同じく秋から冬にかけてといわれます。霊仙山でも同様で交尾の目撃例から10月初旬から１月上旬までは繁殖期と考えてよさそうです。交尾後約 200日後に一子を産みます。６月前後のことです。野生のカモシカが毎年出産するのか隔年出産なのかは各地でまちまちですが、茶子の場合は識別以来３年連続して出産しました。

３頭の子カモシカが生まれたのですが、３頭が皆育ったわけではありません。第一子はビリゲン（雌）といいます。1979年より茶子（母）と行動をともにしていましたが、翌年７月には茶子と離れて行動しだしました。母親が子を敵視しだす「子別れ」がおきたようです。この頃茶子は第二子を出産しました。子別れ後も約１年間ビリゲンは茶子とほぼ同じ行動圏内で行動していました。たまにビリゲンが茶子に近ずくと茶子は頭をさげ威かく



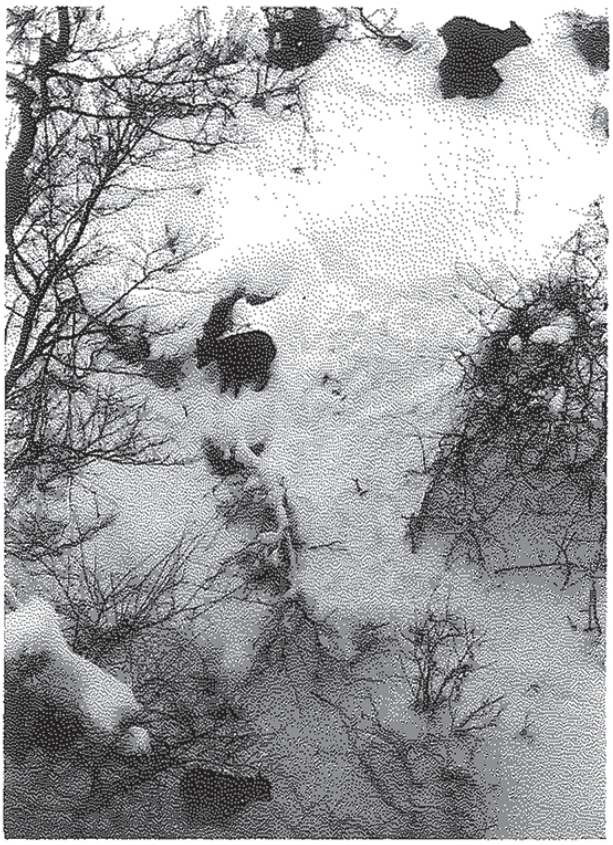
個体識別されたカモシカの動態

したり、頭でビリゲンを押したりしました。親子とは思えない子別れ後の厳しさです。しかし茶子もビリゲンが近くにいることを容認したことがあります。それは1981年１月上旬のことで沢筋ではゆうに２ｍをこす積雪があり季節風も強くふく日でした。互いに体を寄せあい暖をとるように茶子、ダンナ、第二子、そしてビリゲンの４頭が一団となって休息したのです。寒さには強いといわれるカモシカですがやはり冬は大変厳しい季節であるようです。ことに第二子は春になっても茶子とともに姿をみせることはなく、どうも第二子にとって初めての冬がこせず死亡したようです。

1981年５月以降ビリゲンは姿をみせていません。ビリゲンは確実に冬をこしたので、これは茶子の行動圏から離れ完全に独立したのでしょう。茶子とダンナのツガイ関係は現在も続いています。一時この２頭だけになりましたが、６月上旬に第三子が生まれ新たな家族群を形成しました。出産直後と思われる茶子はひどくやせて弱々しくみえます。もともと茶子は用心深いのですが、子連れのときはことさらです。しかし茶子にはおかまいなしにまわりをピョンピョンとびまわり、じゃれつく子カモシカは動くのが実に楽しそうで観察者もホッとします。また確実に新しい季節がめぐってきたようです。

おわりに

はたして第三子は初めての冬が無事にこせるでしょうか。どうもカモシカが生き続けることは私たちが想像する以上に厳しいものであるようです。しかしそんな中で生き続けたことも事実で、環境にうまく適応できる能力もそなえているといえます。最近カモシカが植林されたヒノキやスギの苗を食害すると問題になっています。これもカモシカの適応能力を示す一例かもしれません。いろいろな起因を含んだむずかしい問題ですが、ポリネットなどによる食害防除のようにヒトもカモシカも共存できる解決策をみつける必要があります。



冬のニホンカモシカ（４頭群になる直前）

ニホンカモシカの４頭群

霊仙山に生息するカモシカの生態の一部をお話ししてきました。カモシカをはじめ哺乳動物の生態はわからないことばかりです。皆さんもこのなぞをとくため、滋賀県のすばらしい山々を歩かれてはいかがでしょうか。

（名古屋西高等学校　名和　明氏提供）